



▲伊能忠敬像
(伊能忠敬北海道測量開始記念公園)

北海道測量に込められた、
天文学者としての目的

ところで、伊能忠敬はなぜ蝦夷地から全国測量をスタートさせたのでしょうか。

伊能忠敬は優れた天文学家でもあります。実は、伊能忠敬の心の中には、「日本地図を作る」とは別に「地球の緯度一度の距離を測り、正確な地球の大きさを知りたい」という天文学者としての大きな目的がありました。緯度一度の距離を三六〇倍すれば地球の大きさが分かります。それをもとに、当時狂いの多かつ

た曆をもっと精度の良いものにしたと考えていたのです。しかし、緯度一度の距離を測るには、一〇〇キロメートル以上離れた地点の緯度の計測が必要でした。

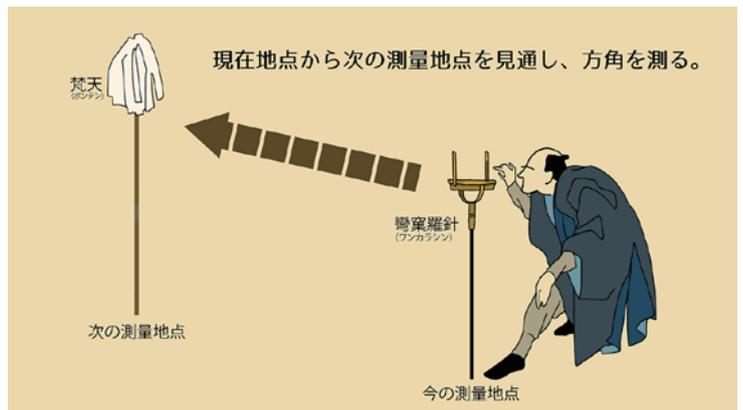
ちょうどその頃、江戸幕府は国防強化のために正確な日本地図を必要としていました。そこで、伊能忠敬の師匠の高橋至時（よしとき）は、江戸幕府に蝦夷地の地図製作を願い出て、測量の許可をもらいます。地図作りをしながら各地の緯度を計測しようと考えたのです。その担当者として、伊能忠敬が推薦され、蝦夷地測量が実現しました。

伊能忠敬像を見学しよう

福島町の伊能忠敬像は、横浜市の彫刻家酒井道久（さかいみちひさ）さんによって制作されました。酒井さんは、東京都富岡八幡宮の銅像の作者でもあります。富岡八幡宮の銅像では伊能の晩年の表情を描いたのに対し、福島町の銅像では全国測量を始めたばかりの熱意をもった若々しい姿が表現されています。

伊能像が手に持っているのは、「彎窠羅鍼（わんからしん）」という江戸時代の測量の道具です。杖の先端に方位磁針（羅針盤）が取り付けられています。方位磁針は常に水平を保つように作られており、足場の悪い野外でも簡単に方位を知る事ができる便利な道具です。腰をかがめて彎窠羅鍼をのぞき込む伊能像の姿は、一風変わって見えますが、江戸時代の測量の現場を表現しているのです。

また、伊能像の腰に差している刀をよくみると竹光（竹製の刀）であることがわかります。金属の刀等を身に付けていると、方位磁針を狂わせてしまうため、作業中は鉄製の品を身に着けないようにしていたといわれています。



▲彎窠羅鍼（わんからしん）を使った測量風景（模式図）

この記事は、福島町教育委員会発行『北海道ふくしま歴史物語』のなかの「日本地図の第一歩は吉岡から」伊能忠敬」の内容を元に作成しています。

ふくしま
歴史物語

